

早稲田大学探検部

2022年一泊ミーティングレジュメ

目次

1. はじめに
 2. 探検部 理念
 3. 探検部 部則
 4. 探検部 方針
 5. 部員に関する覚書
 6. 部会に関する覚書
 7. 審議に関する覚書
 8. 活動に関する覚書
 9. 安全対策に関する覚書
 10. 各役職説明
 11. 部員抱負
-

1. はじめに

一泊ミーティングとは現役の部員が次年度の探検部の方針や体制などを話し合い、現役OB等に向けて提案し承認を得る年に一度の催しである。承認が得られた場合、次年度の探検部は原則一泊ミーティングレジュメに沿って運営される。却下された場合、指摘のあった問題点について再検討を行い、承認が得られるまで提出を繰り返さなければならない。全ての部員は、一泊ミーティングで決まった方針、体制などを正確かつ完璧に把握することが求められる。このようなシステムは1997年に起きたアマゾン川川下りペルー遭難事件を受け、事件・事故の再発を防ぐ目的で作成された。全ての部員はこの経緯を理解した上で部則の重要性を自覚しなければならない。

2. 探検部 理念

「この世に探検するところはない。」と言われてから、半世紀。それでも我々は「探検」し続ける。我々の歩んできた道・未知が人類にとっての既知へと変わり、それが価値になることを願いながら。

3. 探検部 部則

I 総則

第1条 当部は、早稲田大学探検部/ WASEDA University Exploration Clubと称する。

第2条 当部は、日本国内、及び世界各地において探検活動を行う事を目的とする。

第3条 当部は、早稲田大学探検部部則に基づいて活動するものとする。

II 部員

第4条 当部は、第I章 第2条の当部の目的に共感し、かつ探検に危険が伴う事を自覚して個人の意志に基づいて活動し、その旨を記した誓約書を揃えたものを部員として認める。

第5条 部員は三年生までを現役部員とし、四年生以上は原則として現役OBとする。

第6条 現役部員は、年度の初めに部費、保険費を納入し、救命講習（またはそれに類するもの）を受講しなければならない。

第7条 現役OBは保険に加入したものでなければ部の活動に参加する事を認められない。

第8条 現役部員は毎週開かれる部会に参加しなければならない。

III 部会

第9条 部会は部員全員が集まる部の最高決定機関である。部に関する全ての事柄は、部会において審議、決定されなければならない。

第10条 部会は、毎週開かれる。

第XX条 部会は必要に応じてzoom等を利用、併用してオンラインで開かれる。オンライン参加者の署名は参加者全員の確認のもとで代筆が認められる。

第11条 部会には、全ての現役部員が出席しなければならない、無断欠席、遅刻は認められない。

第12条 部員は、部会において決定された事項を遵守する義務を負う。

第13条 緊急時、及び外部・OBの意見が必要だと判断した場合、臨時部会を開くものとする。

IV 役職

第14条 現役部員から役職を選ぶ。

第15条 役職は一泊ミーティングにおいて、部員により承認される。
役職の具体的な職務内容は、毎年一泊ミーティングにおいて確認される。

第16条 幹事長は当部代表であり、部全体をまとめなければならない。

第17条 副幹事長は、幹事長を補佐し、幹事長不在時はその職務を代行しなければならない。

第18条 部で承認された計画が遭難、またはトラブルに巻き込まれた場合、承認した当時の幹事長が部を代表して責任を持って対処しなければならない。

第19条 役職が長期の間、不在の場合はその代行を置く事とする。

V 入部式、一泊ミーティング

第20条 当部は、夏季休業前に入部説明会及び入部式を開くこととする。

第21条 入部説明会は、新入部員の部の体制の理解ならびに部の安全意識の向上のために行われる。入部式は新入部員の入部意志確認及び探検観の発表のために開かれる。

第22条 当部は、今後の活動の展望の場として年末に一泊ミーティングを開くこととする。

第23条 一泊ミーティングにおいて、役職の承認、方針と職務内容の確認、来年度の抱負、今後の活動に関する議論、会計報告などを行うものとする。

VI 審議、承認、却下

第24条 当部の活動は、部に計画書を提出し、部会において審議を受けなければならない。

第25条 計画の審議は、計画に不備はないか、計画はメンバーの経験や技量で遂行可能か、安全対策・遭難対策は万全か、などの点に留意して行う事とする。

第26条 承認された計画に対しては部全体でサポートし、もし隊員が遭難、またはトラブルに巻き込まれた場合は、責任をもってこれに対処しなければならない。

第27条 計画の承認は、審議に出席した全部員の同意、出席した現役OBと入部式を経た現役部員の署名を以って成立とする。

第28条 審議において却下された計画は遂行できない。

VII 安全対策

第29条 部員は、計画を安全に遂行するために、知識、技量、経験を蓄えるように常に努力しなければならない。年に一度、外部講師を呼ぶか、外部の講習に参加した部員による講習を受けることとする。

第30条 当部の活動は、部会において、その計画の中に、危険に繋がるような不備がないかの審議を行い、でき得る限りの安全性が確保されなければならない。

第31条 当部の活動は、遭難、またはトラブルに巻き込まれた場合に備え、現地連絡人、及び在京連絡人を設けて、連絡体制が確立されていなければならない。

第32条 当部の活動は、計画書の中に最終連絡日時が指定されていなければならない。最終連絡日時を過ぎても隊からの連絡がない場合、部はレスキュー体制に入らなければならない。

第33条 計画の審議の際には、参加者の活動歴を考慮し、安全性を確認しなければならない。

VIII 海外活動

第34条 海外遠征に関して、部全体で、遠征に対する認識を深めるために、また審議を繰り返し行って計画の安全性、完成度を高めるために、審議を開始するのは遅くとも出発の2か月前とし最低4回の審議を経て、2週間前には最終審議の場を設けるものとする。

第35条 削除

第36条 海外遠征の隊員は、計画書を提出する際に遠征の意義を明確にしなければならない。

第37条 遠征隊は遠征計画発表の際、在京連絡人を決め、それ以降綿密な話し合いを持たなければならない。

第38条 海外遠征に関しては、海外で遭難またはトラブルに巻き込まれた場合、部が素早くレスキュー体制に入れるようにするために、計画者は計画段階で、実際に搜索活動を行う機関（または個人）、もしくは搜索方法、連絡体制を明確にしなければならない。

第39条 治安面で危険だと思われる地域に行く場合には、隊員の情報収集の徹底、語学の習得、現地とのコネクションの確立など、相応の対策を講じなければならない。

第40条 早稲田大学探検部主催の海外遠征に参加する外部の人間は一時入部を済ませる。

IX 会長、家族への連絡

第41条 当部主催、合同活動の計画に関しては、**会長**に計画書を提出しなければならない。

第42条 海外遠征の計画に関しては、計画書を部に提出した時点から**会長**に経過報告を行い、計画が部で承認されたら最終報告を行うものとする。

第43条 削除

X 部外者との合同活動

第44条 部員が部外者と合同で活動する場合、その部外者が保険に入っている者でなければその活動は部の活動として認められない。

第45条 部員が部外者と合同で活動する場合、その部外者が部外者用の誓約書に署名しなければその活動は部の活動として認められない。

第46条 他団体との合同活動の場合、責任の負担が各団体同等であるという旨の誓約書に他団体責任者が署名する必要がある。

XI 補足

第47条 当部則の改則は、部会、原則一泊ミーティングにおける審議を要する。

第48条 当部則に定めなきことは慣習、覚書に従ってこれを行う。

第49条 当部則は1998年3月14日から施行する。

第50条 第35条は2013年12月17日に改訂された※2。

第51条 第36条は2015年2月1日に改訂された※3。

第52条 2018年度一泊MTG以降、大きな改訂が決まった場合は条項を追記する。

.....

※1 第35条の改定は2014年度一泊MTGの審議を経て可決された。

【改訂前】

第35条 海外遠征に関して、部全体で、遠征に対する認識を深めるために、また審議を繰り返して行って計画の安全性、完成度を高めるために、審議を開始するのは遅くとも出発の3か月前とし、2週間前には最終審議の場を設けるものとする。

【改訂後】

第35条 海外遠征に関して、部全体で、遠征に対する認識を深めるために、また審議を繰り返して行って計画の安全性、完成度を高めるために、審議を開始するのは遅くとも出発の2か月前とし、最低6回の審議を経て、2週間前には最終審議の場を設けるものとする。

※2 第36条の改定は2015年度一泊MTGの審議を経て可決された。

【改訂前】

第36条 海外遠征の偵察行に関しては、探査目的を明確にし、遅くとも1ヶ月前に計画書を提出しなければならない。また、各関係機関への報告を促す。

【改訂後】

第36条 海外遠征の偵察行に関しては、探査目的を明確にし、遅くとも1ヶ月前に計画書を提出しなければならない。また、各関係機関への報告を促す。

第36条を削除する。

偵察行は海外遠征として扱うものとする。海外遠征は第35条に基づく審議期間を設ける。

【改定前】

第35条 海外遠征に関して、部全体で、遠征に対する認識を深めるために、また審議を繰り返して行って計画の安全性、完成度を高めるために、審議を開始するのは遅くとも出発の2か月前とし、最低6回の審議を経て、2週間前には最終審議の場を設けるものとする。

【改定後】

海外遠征に関して、部全体で、遠征に対する認識を深めるために、また審議を繰り返して行って計画の安全性、完成度を高めるために、審議を開始するのは遅くとも出発の2か月前とし、最低4回の審議を経て、2週間前には最終審議の場を設けるものとする。

遠征数増加を目指すため海外遠征における審議の最低回数を4回に引き下げ、安全性の担保は覚書に記した仮承認システムの導入によって図ることとする。

【改定前】部員は、計画を安全に遂行するために、知識、技量、経験を蓄えるように常に努力しなければならない。また、年に一度外部の講師を呼び、安全対策や救助に関して講習を受けることとする

【改定後】

部員は、計画を安全に遂行するために、知識、技量、経験を蓄えるように常に努力しなければならない。年に一度、外部講師を呼ぶか、外部の講習に参加した部員による講習を受けることとする。

4. 探検部 方針

——— 探検にミッションを ———

探検部の部会はずまらない。最近の部会で審議される話題はもっぱら必要な水の量だとか、エスケープルートをどれにするだとか、ロープは30メートルにするか60にするかだとか。安全な活動のためには抜きにはできない話ばかりではあるけれど……。

安全、ピリオド。言うまでもなく「安全」ということばは死傷の可能性がゼロであるという意味ではないし、誰がどう頑張ってみたところでそんな状況はありえない。飛行機は安全な移動手段ですと言うことはできても落ちない飛行機はないし、あれだけ安全だと謳われた原発はあっけなく弾けた。有事の負の期待値を「危険」と呼ぶなら、「安全」であるというのは危険の大きさが許容可能と判断されたある閾値未満であることと表現できる。いちいち意識しないだけであらゆる場面の一挙手一投足に大なり小なりリスクは付きまとう。ぼくらはどこかでそれを認めたうえで、その都度、その行動がリスクを冒すに値するかどうか評価する。リスクを冒すに値すると判断したとき、安全ということばで呼ばれるある種の資格が与えられ、やがて実行へ向けて準備がはじめられる。それがどんなに些細な指先の動きであっても、ぼくらは身体を動かすたびにほとんど意識することなく安全を審査し続けている。

にもかかわらず人間が誤った判断を下す理由は、第一に、危険は結局のところ確率の問題であるからだ。「安全とは危険性が許容可能な基準以下であること」というのは言い換えれば、「安全とは許容可能と定めた基準以下の危険を必ず孕んでいる状態」ということでもある。地球上に絶えず降り注ぐ宇宙線は時々電子回路にヒットする。然るべき素子にヒットして然るべきバイナリデータを書き換えればコンピュータはエラーを吐き出す。それが飛行中の航空機のオートパイロットや銀行の中央コンピュータで起こることもある。確率が極めて小さいために度外視されがちだけれども可能性は常につきまとっている。

第二に、許容可能な危険の大きさを見誤ること。結局のところ閾値を決めるのは人間であるわけだが、ぼくらは完全にすべての可能性を考慮に入れることなどとてもできない。電車とホームの間を踏み抜いてしまう可能性を見越して下を向いていても、巨大地震でパンタグラフが落ちこちてくる可能性までは考えが巡らない。それにあらゆる事象に対していちいち確率計算をできるほどの時間も演算能力もぼくらはもっていない。仮に危険の大きさを正確に計算できたとしても、それがどこまで「許容できる」のかを考えるためには、それを「想定される成果（の期待値）」と天秤にかけてみなければならない。「なぜその成果が重要なのか？」という大きさと「成果が得られる見込み」という確率の積、つまりその期待値がわざわざ危険を冒して実行に移すに値するほどの大きさであるか否か。心停止に比べれば胸骨圧迫によって肋骨が折れることなど問題にならない、というわけだ。

確率の賜物と違って、安全の見極めはぼくらの努力次第で精度を上げることができる、いわばコントロール可能な部分だ。隕石が降ってきて死んでしまうようなことがあったとしてそれはもうどうしようもないことだけれど、火山性地震の頻度が高まっている活火山になるべく近寄らないようにすることは

できる。あるいはどうしても接近して調査をする必要があるならヘルメットを被って短時間だけアプローチする。

安全を正確に判断するのに重要なのは、危険と成果をそれぞれできる限り正確に評価し、「成果に対する危険」あるいは「危険に対する成果」の適正なバランスを見出すことだ。そのためにはまずもって対象となる行動が定まっていること、そして「なぜその成果を得ることが重要なのか？」という動機についてよく理解しておく必要がある。予定している行動が定まらなければ当然その危険は測ることができないし、成果も妄想の域を出ない。動機がはっきりしなければ成果の重要性はわからない。要するに、安全は危険と成果の上に成り立つ概念であり、危険と成果は動機と行動に立脚した変数なのだ。そしてその行動さえも動機の上に立っている。

探検部の部会の存在理由が活動の安全にあるのであれば、そこではまず動機が語られなければ何もはじまらない。なぜそれをやるべきなのか、なぜそれをやりたいのか。それぞれの人間のなかの最もピュアな、混じりつけのないモチベーションを洗い出し、言語でもって説明を試みる。それが部会の場で伝わってはじめて安全のための部会は本来の役割を果たしはじめる。その対話が欠けた部会の先にあるのは、危険をひたすら排除して先細ってゆく退屈な未来か、いたずらに危険なだけのくだらない活動ばかりが増えてゆく愚かな未来だ。

探検部の連中はとかく既存概念やなんかを解体したがるけれど、往々にしていつまで経っても探検ということばは捨象しきれずにいる。けれど、自分のもっとも正直な中心から宇宙の最果てへと向かうピュアで誤魔化しのない動機に丁寧に向き合ってそれを信じてやらなければ、本当にやりたいことなんてわかりっこないし活動の計画なんて出せないはずだ。

もっと言えば、ぼくらは何か冒険へ出かけていく動機に出会えることをどこかで期待して毎週火曜の午後七時を待っていたんじゃないだろうか？ 現実をぶっ飛ばすような現実を垣間見せてくれるような何か。映画の中ならある日突然空から女の子が降って来るところだが、ぼくら観客はたぶん地道に考え、旅をし、探し続けるほかないのだ。部会という場は少なくともそれに手を貸すことはできる。それは部にとって必要な安全の確保であるという以上に、ぼくはそれこそが探検部を探検部たらしめているニュアンスだったりするんじゃないかと思っている。

ここで言う動機とはイマージュとミッションのベクトルである。イマージュというのはつまりそれぞれの人間の中にある景色のことで、原風景とか心象風景と言い換えても良い。探検部は芸術家集団ではないから、部の公式活動は残念ながら主催者の衝動だけでは動かせない。そういうニュアンスはそれとして大切にすべきだと思うが、部として、あるいは隊として活動するにはミッションが必要だ。ミッションを失ったバンドは解散するしかないように、ミッションなしには隊員たちが同じ方向を向いて一緒に活動を実行することはできない。ミッションというのは自分の外の世界を変えるために与えられる命題のことで、あるミッションを心から信じられる有志が集まったとき、良い活動がはじまり、時として本当に世界を変えてみんなをあっと言わせるのだろう。

互いのイマージュに敬意と一定の理解をもったコミュニティとしてありつつ、ミッションを軸に活動をする。というのが探検部としてもっとも健康的な在り方なのではないかと思う。そのためにはひとりひとりの景色とミッションに真摯に向き合い、分解し、時に拡張、そのうえで数は少なくとも、信じられるミッションのある活動を大切に育ててゆかなければならない。そういうわけで今年のぼくらの方針は活動に対して、動機を、あるいはミッションを徹底的に問うことから始めることだ。

5. 部員に関する覚書

A)部員

【1年生】

■条件

- 本人・保護者の署名入り誓約書を提出していること
- 入部費5000円、部費5000円を納めていること
- 入部説明会に参加していること、またはそれに相当する説明を受けていること

■義務

- 部会への参加
- 保険への加入
- 救助講習、救助訓練、読図訓練への参加
- 一泊ミーティングの主催
- 一年活動の主催

■権利

- 部主催の活動の企画
- 活動の承認または却下
- 部の装備・部費の使用、その承認または却下

【2年生以上】

■条件

- 部費5000円

■義務

- 部会への参加
- 保険への加入
- 救助講習、救助訓練、読図訓練を主催
- 救助講習、救助訓練、読図訓練への参加
- 一泊ミーティングの主催
- 新歓合宿への参加、主催

■権利

- 国内・海外での活動の企画
- 活動の承認または却下
- 部の装備・部費の使用、その承認または却下

【現役OB】

■条件

- 部費5000円
- 二回、一泊MTGを主催し、一回以上一泊MTGに参加した者

■義務

- 自分が参加する活動の審議への参加
- 活動時の保険への加入

■権利

- 国内・海外での活動の企画
- 活動の承認または却下
- 部の装備・部費の使用、その承認または却下

B) 入部説明会、入部式

【入部説明会】

入部説明会は主に新入生に探検部の活動の危険性を知ってもらうために行なう。入部説明会では、部の運営（部会、審議、年間行事）・過去の事故事例などを説明し、探検部の活動には危険が伴うことを伝える。アマゾンでの殺害事件と万太郎谷オタキノ沢支流滑落事故報告書・保険についての資料（保護者向け）の配布を行う。また北又谷遭難事故、奥多摩のSRT事故に関しても説明する。さらに本一泊ミーティングレジュメの摘要も合わせて配布し、新入生に探検部の理念と方針を理解してもらう。入部式終了後に誓約書と入部届けを渡し、これに署名をして入部費・部費と共に提出し受理された時点で早稲田大学探検部の部員と認めることとする。

また途中入部希望者に対しては、個別に入部説明を行った後、誓約書と入部届けを渡し、これに署名をして入部費・部費と共に提出したものを受理された時点で早稲田大学探検部への入部を認める。個別の入部説明も入部説明会と同等のものとする。

【入部式】

入部式は新入生の入部意志確認と探検観発表のために行う。入部を希望する新入生は事前に入部説明会に参加し、誓約書と入部届けに署名をした上でこれを提出しなければならない。誓約書、入部届けの受理及び入部費、部費の納入によって入部の意思が確認され、早稲田大学探検部の部員と認めることとする。また新入生はこの会において、自らの探検観を発表しなければならない。

入部希望者が入部にあたる説明をし、入部の承認を得、誓約書に署名してもらう人

- ・入部希望者が未成年の場合 保護者
- ・入部希望者が成人の場合 親

何らかの事情で、親のサインが得られない場合は幹事長と相談の上、一番近い親族等から決定する。

【途中入部】

途中入部希望者に対しては、個別に入部説明を行った後、誓約書と入部届けを渡し、これに署名をして入部費・部費と共に提出したものを受理された時点で早稲田大学探検部への入部を認める。個別の入部説明も入部説明会と同等のものとする。

6. 部会に関する覚書

A) 部会

毎週火曜日18:30から行う。ただし集合時間は18:20とする。

部会は週に一度部員全員が集まる会議であり、活動と併せて探検部を構成する重要な要素である。部会では、活動の審議・報告や部の運営について話し合う。活動の審議は安全対策の要であるため修正すべき点や疑問があれば学年を問わずに積極的に発言することが求められる。部会の性質上、遅刻・欠席は許されない。遅刻・欠席する場合は事前に幹事長に連絡すること。そしてあまりに遅刻・欠席が多いと、**人事係**がその者に気を付けるよう通告する。しかし、それでも改善されない場合は部会において話し合いの場を設けたのち審議の内容を受けた幹事長の判断によって除籍される。

活動を計画した者は部会の前日までにGoogleドライブに計画書をアップし、部会中書記は議事録を取り部会後は部内に共有する。最終版が完成したら、必ずGoogleドライブの最終版フォルダにアップロードする。

【部会で行うこと】

装備返却チェック

活動したCLは装備が返却されているか部会での報告時に確認し、それらの有無をCLが**団体装備LINE**に報告する。**装備係**はその後実際に返却されているか確認する。団装を借りる時、返す時は**団体装備LINEに必ず記載する**。

活動・遠征・イベント等の報告（概要報告と感想・反省）

活動後、最初の部会で行う。ホームページなどで活動は外部へと発信していくため写真や動画があるとよい。報告前に活動の写真や動画をGoogle Photoにアップロードする。

予算会議

部費を使用する場合に行う。足りない装備の購入やイベント実施の費用などを検討する。臨時部会において予算会議を行う場合その出席が全現役部員の4分の3を下回った時は出席した部員の4分の3以上の賛成を持って使用を承認する。団装を活動中及び貸し出し中に紛失または破損した場合、それぞれの事案に応じて部、隊、個人の3者を候補としてその負担の割合を審議する。その際共同責任の存在を考慮し過度の個人負担を防がなければならない。

計画書の審議

※審議を参照

探検プレゼンテーション

探検プレゼンテーション（以下探プレ）とは探検部の活動に関わる内容・過去の活動・過去の探プレ・やりたい事・個人活動の報告・特殊な技術のプレゼンなどを他の探検部部員に対して行うものである。発想や情報の共有、隊員の募集を目的としている。

諸連絡

部の方針

部の体制や方針、部則についてなにか変更や提案がある者は、その理由と内容を明確化して文書を作成し、事前に他の部員全員と共有しなければならない。提案内容をよく吟味し、協議してから、出席した部員全員の賛成をもって提案を承認する。

役職報告

必要な時に適宜行う。各々の役職で何か問題がおこった場合や会計の処理などを行う。また会計報告は前期末後期末の1年に2回行うものとする。

B) 臨時部会

当部部員が部会以外で審議や予算会議を行う必要がある際に開かれる。臨時部会を開くには、現役部員の3分の2以上の出席が必要。内容は部会と同等。

7. 審議に関する覚書

部員が、早稲田大学探検部が主催する活動を企画するときは、現役OBを含めた全部員による審議を2回経たのち、全部員の承認を受けなければならない。

計画の審議は活動目的や計画の実現可能性、計画の安全性などを全部員で審査し、その計画の内容を全部員で共有するものである。

全部員は、計画の内容に疑問があるときは質問する等、審議に積極的に参加しなければならない。部員は、計画を認められないときは、その計画を却下することができる。全部員の承認が得られないときは、計画を実行することができない。

また、審議の後承認された計画の内容は全部員が共有し、事故が発生したときはすぐに対応できるようにしなければならない。

【計画の承認、却下】

早稲田大学探検部主催の活動を承認するということは、即ち事故が起きたときには、全部員が事故の責任を共有するという意味を持つ。全部員が計画を承認、却下する権利を有する。部員が計画を認めるときは、その計画書に付随する審議承認の署名簿に署名する。出席した全部員の署名を得られない計画は却下されたものとし、実行することができない。署名簿は最終版計画書に添付し倉庫に保存する。

【審議の欠席】

原則として、部員は審議に参加しなければならない。ただし、幹事長の承認を得て審議を欠席することができる。しかし、その場合も欠席する部員はGoogleドライブに挙がっている計画書を読んで、疑問点を残さないようにする必要がある。そして、部会後に挙げられた議事録を必ず読まなければならない。欠席した部員は計画を承認したものとするので、その部員の署名がなくても、計画を実行することができる。その部員は計画の責任を共有しなければならない。

【審議の内容】

部員は、計画の安全面などにおいて疑問点を残してはいけない。実際に事故が発生したときを想定し、対応を準備しなければならない。そのときに必要となる、地図等の活動地域情報に不備がないか確認する。また、計画の目的を明確に定め、共有する。計画が複数日に跨るときは、計画の進行に応じたエスケープルートを確認する。装備等に不備がないか確認する。

特別な技術を必要としない活動であっても、計画に参加する部員の能力、上級者と初心者の人数関係等を考慮する。

【計画書】

計画の審議は計画書を基に行う。CLは計画の三回前の部会の前日までに計画書を作成しなければならない。また計画書はすべての項目が埋められていない限り第1版とは認められない。計画書に記載する内容は下記の通り。

国内活動に記載すること

- ・早稲田大学探検部主催の旨。あるいは、主催団体と責任の所在。
- ・更新日時と版。
- ・最終連絡日時。
- ・在京連絡日時
- ・メンバー情報。CL、SL、記録係、名前、現住所、実家の住所、携帯番号、メールアドレス、緊急連絡先、所属、学籍、学籍番号、生年月日、血液型、アレルギー、保険、3年以内に受診した歯科医院名。
※歯科医院に関して、国内活動においては必要とされた場合のみ記載するが、海外遠征においては全隊員が記載しなければならない。従って過去3年以内に歯科医院を受診したことのない遠征隊メンバーは事前に受診してカルテを作成してもらう必要がある。
- ・活動期間。
- ・活動日程。
- ・予備日の有無
- ・活動の目的、概要。
- ・活動地域概要、地図。
- ・個人装備、団体装備、（緊急装備〈プーリー、お助けひもなど〉、医療装備〈三角巾、サバイバルシート、ろうそくなど〉）。
- ・食料計画。
- ・在京連絡人。
- ・現地連絡先、現地医療機関。
- ・安全対策。危険な箇所があれば明記する。
- ・予想されうる事故
- ・日の出日の入り時間
- ・ケータイの電波状況
- ・潮の満ち引き時間（海の近くで活動を行う場合）
- ・有事の際の具体的な対処方法。エスケープルート、緊急時連絡体制、早稲田大学の休日連絡先等。
- ・緊急時連絡体制フローチャート。

海外遠征の計画書に追記すること

- ・詳細な現地情報。社会、通貨、査証、入国審査、交通、宿、ITアクセス等。
 - ・詳細な活動日程。アプローチ、入山、下山、帰路等。
 - ・現地の状況に応じた安全対策。感染症、食べ物、治安、保険等。
 - ・第二在京連絡人。
 - ・在京との連絡手段。
 - ・明確な緊急時の体制。対策本部、想定できる危険、状況に応じた連絡体制等。
-

原則として、全部員の承認を受けた後に、計画書の内容を変更することはできない。ただし、道路事情、部員の体調不良等の不可避の理由で計画の内容を変更することができる。そのときは、全部員に変更内容を通達しなければならない。

8. 活動に関する覚書

審議で企画が承認された場合、活動を行うことができる。

活動には「国内活動」と「海外遠征」がある。

主催団体で分けると「当部主催の活動」「合同活動」「当部以外が主催の活動」がある。

さらに特記事項として、部員以外の者も参加する新歓活動について記述する。

A)探検部としての活動の必要条件

探検部として活動をするには、安全に活動を行うために様々な条件が課される。また、自分たちの行った活動を内外に対して報告をしなければならない。以下のことを遵守する。

■活動前

- ・計画参加者の審議出席
- ・会長の承諾（課外活動届へのサイン）
- ・大学への課外活動届提出
- ・活動部員全員の計画内容、緊急時の対応法の熟知。
- ・活動に必要な保険の加入（学傷保含む、他大生は各大学に問い合わせる）
- ・隊員の保護者、緊急連絡人の活動参加の承諾、緊急連絡体制の理解
- ・早大探検部主催の計画に参加する部外者は誓約書に署名
- ・隊員内でお互いの技量や知識を確認する
- ・保護者への参加報告
- ・ブランクなどで技術に不安のある者、初心者などは必要に応じ、事前学習として活動前に探検ゼミと称し机上講習または技術実習を行う。

机上講習...目的は初心者、隊員、リーダーの意識向上、部全体の知識の向上。リーダーは必要に応じて隊のメンバーに机上講習の項目を伝え、隊のメンバーはそれについて調べ、部会で発表する。

技術実習...活動前に活動参加者及び希望者に対して行う技術の習得、向上、再確認を目的として実習を行う。必要に応じて外部への講師依頼、又は社会人団体への加入も行う。

■活動中

- ・計画書のできる限りの遵守
- ・在京連絡人への活動開始、終了の連絡

■活動後

- ・次の部会で活動報告を行う
- ・探検部のHPに活動報告を書き込む。（遠征等の長期活動は1か月以内。週末活動は活動が終わった次の部会までに行う。週末活動の報告は隊員が報告書用紙に直接書き込み、それを広報がHPにアップロードする。）

報告書（国内活動の場合）に記載すること

- ・ 期間
 - ・ 活動結果（目的達成の有無）
 - ・ 地図（行動記録や、特徴的なポイントを載せる）
 - ・ 計画書からの変更点
 - ・ 上記の問題点
 - ・ 上記の原因
 - ・ 上記に対する改善策
 - ・ メンバーの感想、反省（活動前考えた探検的意義が活動を通してどのように変化したかなどを含めて）
-

B)活動の分類

【活動地域による分類】

国内活動

- ・ 国内で行う活動全般を国内活動と指す。
- ・ 審議回数は最低2回。

海外遠征

- ・ 海外で行う活動全般を海外遠征と指す。
- ・ 審議回数は最低4回。
- ・ 遅くとも出発の2か月前には審議を始める。また、実行日の2週間前までに計画書の最終版を作成しておかなければならない。
- ・ 計画段階で遠征の意義及び緊急時の対応を明確にしておかなければならない。
- ・ 第1版を出す段階で部は仮承認する権限を持つ。仮承認された時点で会長、学生課に提出できるが最終版が承認された後のみ実行できる。

【主催／責任による分類】

当部主催活動

早稲田大学探検部が主催する活動である。審議での承認が必要。部外者が参加する場合は当部主催時の部外者用誓約書（新飲用の部外者用誓約書とは異なる）の署名と保険への加入が必要。事故の際は、当部が主体となって救助活動を展開する。

合同活動

当部と他団体が合同で主催する活動。各団体で活動の承認(審議またはそれに属するもの)が必要。審議の際、両団体のCL,SLまたはそれに準ずるレベルの隊員が審議に参加することが必須の条件となる。部則に従い、責任の負担が各団体同等であるという旨の誓約書と合同部外者用の活動誓約書にサインしてもらい、他団体が損害賠償保険・遭難捜索費用保険に加入していることを確認することが必要となる。事故の際は、両団体合同で救助活動を展開する。

当部以外が主催の活動

当部部員が参加する他団体主催の活動。審議で承認された場合、当部以外が主催の活動として認められる。ただし、当部は活動全体に対する責任を負わない。事故の際は、他団体が主体となって救助活動を展開する。

また、審議で却下されても活動に参加する場合、活動に参加する部員は、当部とは一切関わりがなく自己責任で行動するという内容の誓約書に署名しなければならない。

当部公認活動

倫理的又は法的にグレーゾーンであり大学の許可が得られそうにないが探検部で実行すべきと判断した場合、学生課には提出しないが主催活動と同等に扱う。

個人活動

当部部員が最終審議を通さずに行う活動。もしくは部長に却下されて実行が不可能になった活動。当部とは関わりがなく、活動に一切の責任を負わない。

新歓活動

新歓期において部員でない者が参加するための条件は以下の3点。

①事前に活動についての説明を受けていること。

原則的には活動の直前の部会に参加しそこで説明を受けるようにしてもらう。しかし入学して間もない新入生の忙しさを考慮し、別途きちんとした説明会を開くなど柔軟に対応する。

②短期掛け捨て保険に加入していること。

掛け捨て山岳保険か掛け捨てハイキング保険のどちらに加入させるかは、保険係が活動の内容を考慮して選択する。

③部外者参加用の誓約書に署名してもらうこと。

新歓期における探検部の活動に参加する新入生は、部外者参加用誓約書（新歓用）に署名しなければ活動に参加できない。これは新歓合宿においても同様である。

活動分類と装備貸し出し

当部員が活動を行う場合、当部主催の活動及び当部公認の活動の場合に団体装備を使用することができる。しかし部の審議によって却下された活動及び個人活動の扱いとなった活動では団体装備を使用することができない。

9. 安全対策に関する覚書

探検部の活動は危険が伴うことが多い。入部希望者には入部式などでそのことを十分理解してもらい、活動をする際は、自己責任で大怪我や死亡事故につながる場合があることを知ってもらう。また同時に、探検部がとる安全対策も説明し、具体的にどのような意識で活動に参加するべきかを知ってもらう。また探検部の直面する危険は活動中におけるものとは限らない。部員は日々、相互に健康を保てるように配慮しなければならない。

【基本的な安全対策】

以下は活動の種類に関係なく行われる基本的な安全対策である。活動前・活動中・活動後の3つに分けて記載する。

■事前対策

活動前の事前対策で、具体的にやるべきことは

- ・各活動における安全対策について十分な審議を行なう。安全対策に著しい欠陥がある場合は、その計画は却下される。
- ・普段から体力・技術・知識を蓄える。
- ・全現役部員は、救助講習と救助訓練及び読図訓練の3つに必ず参加する。
- ・探検部で取り扱ったことのない技術や知識を用いた活動を企画する際は、審議時に探プレとしてそれらの知識・技術を解説する。これにより活動に参加する部員と審議する側の部員との理解の差をなくすることができる。
- ・審議において現役部員のみでは審議能力に不安がある場合は、OBや外部団体など、経験者や有識者に、計画書に不備がないか確認してもらう。
- ・審議で危険と判断された活動や、隊員の実力が不足していると判断された活動を行う際は、それに先んじて練習としてより危険性の少ない場所で活動を行う。この活動を通して、隊員同士の技術や判断力の有無を確認する。

■活動中・事故発生時

活動中や事故発生時に、危険を回避するために取るべき行動は以下。

- ・活動中は常に危険を意識して、事故を回避するように努める。
- ・活動中、特に活動のCL、SLは現地の天候・治安・隊員の体調・精神状態などを可能な限り常に把握し、状況に応じてより安全と思われる行動をとる。
- ・計画の大幅な変更が起こった際は、可能なら在京連絡人に相談し、撤退も含めて検討する。
- ・在京連絡人は最終連絡日時を過ぎても連絡がとれない場合、ただちに緊急連絡体制に入る。
- ・計画書の行動予定をできる限り守る。
- ・活動中、事故や問題が発生した場合、緊急時フローチャートに従い状況及び打開策を隊員同士で話し合い、冷静に判断を下す。
- ・二次遭難の危険性を理解し、セルフレスキューを行う。またセルフレスキューの限界を認識した上で無謀な行動をとらない。

■事後対策

I 事故がなく活動が終了した場合

→活動報告において、危険な面や計画に不備はなかったかなどを批判的に検討し、これからの活動に役立てる。活動報告をブログにあげる際は、CLだけでなく各隊員の感想と反省も記載する。反省を明文化して全部員で共有することにより、部員の安全意識の共有と向上を図ることができる。

II セルフレスキューで解決した場合

→必要であれば事故報告書を作成する。どのような事故でも部会においてその内容を報告し、全部員への共有を図る。現役の探検部だけでは事故原因の解明や、事故を受けての部としての対応に不安がある場合は、当部OBや事故を起こした際の活動に詳しい外部団体の人を呼んで意見を聞く。

III 外部機関によりレスキューが行なわれた場合

→必ず詳細な事故報告書を作成する。活動の自粛を含め検討する。上記II同様、現役の探検部だけでは事故原因の解明や、事故を受けての部としての対応に不安がある場合は、当部OBや事故を起こした際の活動に詳しい外部団体の人を呼んで意見を聞く。

【新しい活動に対する安全対策】

新しい活動とひとまとめにしても、その内容は活動の種類によって多岐に渡るため、十分な安全対策は、その活動ごとに検討していく上でしか作ることはいできない。探検部にとって、さらにはその部員にとって新しい活動の際には、現役OBに相談、過去資料の精読。外部団体に話を聞く、所属する等様々な対策を行ってから、計画書第一版を出す。

【救助講習・救助訓練・読図訓練・事故対応シミュレーション】

年に最低1回、外部機関による救助講習を受講し、ロープワークなどを用いた救助訓練も同じく開催されなければならない。この救助講習及び救助訓練は人事係が計画、運営する。春にファーストエイドを中心とした救助講習を行い、秋にロープワークを中心とした救助訓練を行うものとする。救助講習はファーストエイドを軸とした座学が主であるが、救助訓練はそれらファーストエイドとロープワークを合わせた複合的な実技を行う。また、この機会を活用して、探検部の過去の事故を振り返り、大事故が起きた際を想定し、大学や家族、社会に対する部の対応をシミュレートする訓練も行わなければならない。

年に一度、読図訓練を行う。読図能力の向上により、安全対策及び活動案の充実を図る。

もし救助講習、救助訓練及び読図訓練をやむを得ない理由で欠席した場合、欠席した部員はそれに類する講習、及び訓練を日本赤十字社や日本山岳会などの然るべき機関において受講しなければならない。するか、審議を通過したそれに類する活動に参加しなければならない。

【在京連絡人】

在京連絡人は、連絡係であると同時に活動する隊員の一員であり、部員が探検部の国内活動や海外遠征に行った際、東京において活動隊に関する連絡を統括する。

事故が起こった場合、関係各所と連絡を取り合い、事故状況や事故に対する各所の対応などの全体を把握する。事故が起こった際、状況を把握していない人に連絡を入れる場合は適宜、その時点での状況を説明する。

■在京連絡人の行うこと・条件

在京連絡人は早稲田大学探検部に所属するものになる。

在京連絡人は基本的により多くその活動の審議に参加している者が優先される。審議に参加していない者が在京連絡人となる場合は、その審議で話された内容を補える説明を受けなければならない。

在京連絡人は活動のLINEグループなどに参加し、他の隊員同様常に予定される活動の最新の全容を把握していなければならない。

在京連絡人は計画内容、緊急時の体制を熟知する。

在京連絡人は連絡日時と最終連絡日時を把握する。

在京連絡人は、隊の活動中、常に紙の最終版計画書を携帯し何時でも連絡が取れる状況にいないといけない。

在京連絡人は隊の状況を把握していなければならない。

在京連絡人は関係連絡先の電話番号を把握する

長期活動中、活動隊の状況に合わせて、次回連絡日時と最終連絡日時を再設定する。

※最終連絡日時を過ぎても隊員が音信不通の場合、計画書を参照して緊急体制に入る。

■国内活動の在京連絡人

隊からの活動開始連絡を受ける(メールでも電話でもよいが、連絡がつく方を優先する。天候などで活動日程が変わりやすい活動は、電話連絡が望ましい。)

活動が終了した際、隊員から連絡を受ける。その旨をCLまたは在京連絡人がその他の部員にメーリングリストを使って送る。

活動が終了した際、隊員から連絡を受ける。その旨をCLまたは在京連絡人がその他の部員にLINEの在京連絡グループを通じて送る。

■海外遠征の在京連絡人

第一在京連絡人と第二在京連絡人を設ける。

第二在京連絡人は、第一在京連絡人が不在の時の為の保険として存在する。

在京連絡人は、国際電話が使える事を確認する。

新たに追加在京連絡人(第三在京連絡人など)を設ける場合、在京連絡人は計画書の詳細を説明、引継ぎを行い、隊員にもその旨を伝えておく必要がある。引き継ぐ際には、隊の状況、計画の変更など詳細に伝える。

出発直前、特に確認する事

隊員と連絡日時と最終連絡日時を確認し合う。

在外日本大使館や現地連絡人の連絡先を確認し合う。

活動の日程を確認しあう。

緊急時の対応方法を確認し合う。

出発後

隊員との連絡事項を果たす〔現在地、現在地状況(治安など)、活動の進捗状況、行動予定、隊員の健康状態、必要な場合は次回連絡予定日や最終連絡日時を再設定〕。

連絡を受けた在京連絡人は、他の部員に経過報告をメーリングリストで行う。

連絡を受けた在京連絡人は、他の部員に経過報告をLINEの在京グループで行う。

最終連絡日時を過ぎた時、緊急体制に入る。

【緊急時連絡体制】

最終連絡日時の1時間前の時点で隊員から連絡がない場合、まずメーリスで連絡が遅れている旨をつたえる。その後最終連絡日時をすぎた場合は、以下のフローチャートに沿って連絡を回す。

最終連絡日時の1時間前の時点で隊員から連絡がない場合、まずLINEの在京グループで連絡が遅れている旨をつたえる。その後最終連絡日時をすぎた場合は、以下の緊急時フローチャートに沿って連絡を回す。

【感染症対策】

部会参加後2週間以内になんらかの感染症を発症していると医師に診断された場合、即刻部全体に通知し、適切な行動をとる。また、自身の体調不良を自覚している場合は部員との接触を控える。

10. 各役職説明

【幹事長】

久保田渚

業務 探検部員であること 部員を代表して責任を負うこと 部会の運営
学校・外部との窓口となること

抱負 私は探検部をありとあらゆる方法を使って、やりたいことの発見。それを遂行する組織にしたい。なぜか？探検部は前提として、自分で目的の創出をしなければならないという特徴があるからである。他の組織と比べ、我々早大探検部は一貫した活動内容というものが存在しない。探検部と部室を同じにするスキー部はスキーをするという一貫した活動内容がある。山岳部であれば、山に登り、クライミングなどの一貫した活動内容が存在する。基本的に、組織には、所属することによって何かしらの一貫した活動内容が存在する。それに比べ、我々探検部は、その活動内容を自分で決定することができる(目的を決定しなくてはならないとも考えられるが、探検部は自分で自分のやりたいことを決定したいという自我の強い人間の集まりであるし、それをしたいから入部したという前提があると考えられるため、ここではこれを良い特徴であると捉えるものとする)。

探検部の活動は、山に登ったり、沢に登ったり、ギャルになったり、宇宙に行ったり、永久理論について発表が行われたりと、多岐に渡る。探検部は自由に目的を創出し、自由に思考し、自由に実行することができる。これが我々早大探検部の重要な特徴であり、特別な資産であると考え。ゆえに私は、私が探検部を、「目的の創出を行い、それを遂行する組織にしたい」と考える。

私は今年、異例ともいえる、主将というポジションにつきたいと考えている。主将というポジションは、早稲田大学のサークルとして、探検部が成立するために必要ない。早稲田大学のサークル登録は、幹事長、副幹事長、会計の3役がいれば成り立つの。ではなんで今年、幹事長の代わりに主将というポジションを設けたのか。それは、私が中心となって今の探検部を変えていきたいからである。探検部の何を変えたいのか説明するために、探検部がある意味から考えたいと思う。まず前提として、探検部がある意味は、所属する人の数だけ存在する。そうではあるが、探検部が存在する重要な理由として、部会における安全対策を多角的視点で行うことが挙げられる。そういった意味がある部会において、現在、安全対策が形骸化している。今年計

画されている海外遠征は今のところ、プトラナ台地、マヤ、ナカタン氷河調査がある。コロナの影響で海外遠征に行けない状況が続き、現役の中に海外遠征経験がある者はいない。さらに、今年で海外遠征にいった経験のある先輩は現役OBになる。経験がある先輩がいなくなったことに加えて、安全対策が形骸化している今年は、現役皆が考え探検部を変革していく必要があると考える。安全に対し最善を尽くすことは、探検部で活動行う上で、最低条件でなくてはならない。私たち探検部は自分のやりたいことを考え、それを探検という形で実行する組織である。我々が志す探検は、往々にして危険が伴う行為である。そのため、我々は、探検が危険を伴う行為であるということを、常に意識しなくてはならない。死とは探検の結果として最悪の報酬である。探検の成果を持ち帰らなくてはその者の探検は消滅してしまうからである。探検という観点からも、本人にとっても最悪の結果を招かないために、計画が安全に行えるものであるかどうかを考えることは必要である。探検を行う上での、最低ラインの死守のために私は主将になり、率先して考え、実践していく存在を目指す。それは1人の力では成し遂げることができない。それは現役みんなが自主的に考えることにより実現することである。私のポジションはみんなの承認がなくては成り立つことができない。私はこれを実現するに足る人間であるのか、今後常に部員全員で見ていて欲しい。

【副幹事長】

番場良平

業務 幹事長補佐 幹事長不在時代理 各役職の監視 雑務

抱負 思うに探検部には圧倒的な幹事長が必要である。探検部員はみな探検をしたいと考え入部するが、個々が思う探検とは千差万別。しかし、探検部が存続する為には組織として統一される必要がある。そのためには圧倒的な幹事長を頂点に探検部は強固に連帯し、理想の探検に向け前進せねばならない。僕はこの早稲田大学探検部副幹事長として部が直面する現実的な問題に対処し、藪を払っていく所存であります。

【会計】

御法川息吹

業務 **【部内】**

①部内予算作成

部費をどのように使うか決定する。また、それを部員の前で発表し、承認を求める。

②部費・遭難救助対策費の徴収と管理

③会計報告(春学期・秋学期)

予算とすり合わせつつ、実際の収入・支出を発表する。

④立替額の支払い(常時)

部費で支払う必要がある物を購入した部員に当該額を渡す。

⑤領収書の収集(常時)

予算申請のため、領収書・レシートを収集する。

【部外と関わる業務】

①部外予算申請(前年度の3月)

②サークル継続書類の記入及び補助金申請

③イベント実施報告書作成

抱負 金銭の正確な運用・管理を心がける。書類の提出など、できるだけ忘れないようにする。

【書記】

番場良平 金山野絵 杉原啓介

責任者 番場良平

業務 部会、その他会議などの議事録を作成、管理する。

抱負 議事録とは美。美とは早さと正確さの黄金比。(番場)
後の記録方法の手本となるくらい見やすいものを残す (金山)
読みたくなならない議事録を作る。(杉原)

【外渉(渉外・広報)】

渉外：窪田航規 土肥拓海
広報：土肥拓海 小野友暉 久保田渚 杉原啓介

責任者 土肥拓海

業務 渉外：探検部に送られてくるメール、ダイレクトメッセージ、ホームページの書き込みを対応する。
広報：SNSの運営をして、外部に情報を発信する。

抱負 チャンスは逃さない(窪田)

丁寧な返信！迅速な対応！溢れる気遣い！（土肥）

頑張って公式ウェブを誰かにやらせます。（小野）

我々探検部は外部から見るとどう見えるか忘れてはならないと思う。そうでなければただ探検部内での評価しか見えなくなってしまう。広報係は客観的視点を与えてくれると思う。（久保田）

活動を身内ネタで終わらせない。活動の記録を誰が見ても理解できる形にする。（杉原）

【デジタル(ウェブ・アーカイブ)】

ウェブ：窪田航規 小野友暉 久保田渚
アーカイブ：窪田航規 土肥拓海 小野友暉

責任者 小野友暉

業務 ウェブ：公式ウェブサイトを作り直し、継続的に更新する。
旧サイトはデブリと化しているので新たに開設する。

定期配信をする。
任意または有志の部員に寄稿を依頼する。
ロリポップサーバー, nginx, node.jsなどを使用する。
wasedatanken.jp上にアーカイブも保存 (アクセスを制限) 。

アーカイブ：新しい情報の追加や、過去の活動等の検索をユーザーフレンドリーにする。
過去の情報を集め、互換性をもったデータとしてまとめる。
Gitに同期(?)。
デジタル担当記録系の個人PCから編集。

抱負 ロマンと実用性を両立させる(窪田)

動画、写真、文章をしっかりと記録する。これは探検部、いや人類の役に立つだろう。たとえどんなにくだらない記録でも.....(土肥)

探検部のデジタルは終わっている。ドライブやLINEには日々キャップとラベルが付いたままのペットボトルみたいなファイルが投棄され続けている。夢の島はもう満杯である。これからはリユース、リデュース、リサイクルを推進しなくては持続可能な開発は達成不可能だ！！(小野)

私たちが望んだ形で、探検活動を外部に伝える手段として活用していきたい。私たちの活動を客観的視点から見るとどうつるのか忘れないためにも必要な仕事である。(久保田)

【装備】

御法川息吹 金山野絵

責任者 金山野絵

業務 LINE運営、部会前の倉庫確認、現在ある装備のリスト化、加えて装備係規則の(2)(2015年作)を復活させたいと考えている。

抱負 (御法川)

きちんとした部装の管理制度を組みたい。(金山)

【人事】

番場良平 御法川息吹 杉原啓介

責任者 御法川息吹

業務 資格を持つ外部講師による指導を全部員に直接提供するため、救助講習の場を設ける。

部員名簿を改定し、部員の能力や技能をまとめて記録し、活動に参加できるか判断する際の材料とする。

部員の保険加入状態を管理する。以下の保険の手続きの代行・更新、保険内容の確認と説明、また保険料の徴収を行う。Jro(日本山岳救助機構会員制度)(なお早稲田大学生は学生障害賠償保険とし学生健康増進相互会に自動的に加入している。)

抱負 組織は個人の集まりなのだ。なので個から全体を考えよう。(番場)
安全の要という自覚を持ってあたる。(御法川)

どんなことに何が必要なのかを考え、高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応する。(杉原)

【新歓】

窪田航規

責任者 窪田航規

業務 新入部員の勧誘。

抱負 質より量。とりあえずたくさん入れてみる。

10. 部員抱負

現役

【窪田航規】

熱狂する。

【土肥拓海】

みうらじゅんになりたい、とりあえず髪を伸ばすところからはじめようと思う。

【番場良平】

自分自身に慣性を感じる。自分自身に大きな質量を感じる。一歩動き出すその瞬間に全身全霊をかけてゆきたい。

【御法川息吹】

今年は行動する年にしたいと思う。可能性が薄いのではないかと考えるだけで、なかなか実行できないことが多かった。考えるより先に、とりあえず動いてみるくらいのエネルギーが欲しい。体力もつけたい。

【小野友暉】

受験していた頃にはまったく想像もできなかったくらい遠くに来た。一年が長かった。もう何年もここにいるような気がする。体感時間が伸びた分だけ長生きの効果が得られたわけだから得をしたことになるだろうか？

自分がどういう景色を心地よいと思っているのか少しはわかりかけた、ような気がする。来年はそれを見に行く。雑誌作りとか極北ウラルとかアイスランドとか北海道とか。やりたいことはごまんとある。探検部の活動としてやるという方向にはならないかもしれないけれど。だから目下、ここがいつまでもぼくにとって居心地の良い場であり続けるように庭師をやろうと思う。

今年は探検とは何か？的なテーマで四苦八苦していた。けれど、もし、探検ということばがぼくにとって（ニアリーイコールであれ）それほど重要な

意味をもたないものだとしたら？ というわけでぼくは探検ということばを一度捨象して、まっさらなところからなにかもっと別な世界との連絡の付け方を試してゆこうと思う。

【金山野絵】

コンスタントに杜撰じゃない計画を出したい。

【久保田渚】

今年の4月24日にちょうちん穴の活動に参加した。これは初めて参加した探検部の活動であった。この日、青梅線の線路に火花が飛んだか何かで、すぐには帰れず橋の上で円になってお酒を飲んだ。先輩方はお酒を飲みながら「お前にとって探検とは何か？」と質問した。たしか私は、「私が探検と思ったらそれが探検である」というようなことを言ったような気がする。一般的なサークルなら「高校の時、部活何やってたの？」とか聞くところを、ここでは、「お前にとって探検とは何か？」と聞いてくる状況に、なんだか心地良さを覚えた。

その後入部式で、「お前にとって探検とは何か？」と聞かれた。私は自分にとっての探検とは何なのか、掴むことができずにいた。あの橋の上で抱いていた心地よさが揺らいでいた。にもかかわらず、私はその後も探検部に居座り続けた。探検がしたいが、自分の探検を見失い、迷い続けていた。迷いはするものの、探検をしたいという気持ちをなくしたくなかった。だから、私はこれまで自分の探検を探し、断片的に拾い上げてきた。そして、今回の一泊ミーティングは、これを繋ぎ合わせて形にするきっかけをくれた。

では、断片を繋ぎ合わせた結果について話していきたい。探検とは、フィールドワークを通し、未知の発見をして、人々に影響を及ぼす行為であると考えている。ここでいう人々というのは、活動内容によって変化すると考えている。学問の分野における未知であるならば、調査してきた結果を大学の教授に伝える方が、結果として社会にとって有益な情報になると考えるのが自然であるように、伝える相手は活動の内容により変化する。私が考える探検するために、計画段階で自分にとってそれが探検であるかどうか考え、考え、考え抜く必要がある。そしてそれが探検であると自分で納得がいくことができれば、計画に移す。私が考える探検とは活動の結果を持ち帰り、人々に影響を及ぼすこと、であるため、何らかの形で社会に活動の結果を伝える必要がある。その結果が社会にとって良い影響を及ぼすものであればよいが、その結果がどのような影響を及ぼすかどうか活動した本人は知りえな

い。つまり探検は自分の手を離れ、評価される。それが、世界を変える可能性も秘めている。そう考えるとみんな探検せずにはいられないと思う。

この探検観に結び付いた、計画として、ネパールのチャウパディ、人身売買、売春業界、麻薬売買の調査を考えている。もちろん、これらは私がインターネットで調べることができるくらい既知のものである。しかし、私は、視点を変えることによって新しい発見をし、社会に影響を及ぼすことができると考えている。例えば、チャウパディは悪しき慣習であるという考えから、批判的にこの慣習を見る場合がほとんどであるが、批判的視点を捨て、この慣習を見た時、未知の発見があるのではないか。人のアクセスがむずかしい山間部と、人の多い都市部ではどういった違いがあるのだろうか。まだ構想段階で考えをまとめ切ることはできていないが、私は必ず探検がしたい。絶対に探検すると決めている。

【杉原啓介】

今何を成すか。どうやったら自分のやりたいことを実現できるか。今何が必要なのかを見極められるような1年にしたい。

現役OB (任意参加)

【田口慧】

振り返り

この世に最早探検する場所はないと言われて早半世紀...※要出典

Googletarthで世界中を眺めることができるようになり、地理的空白は消滅したに等しく、探検と親和性の高い登山などのアクティビティーは悉くスポーツと化し、「創造的登山」なんという言葉は化石にもならず土に還ってしまったようにも思える。地球を探索するには遅すぎ、宇宙を探索するには早すぎる時代に生まれた探検を続けることに意味はあるのか...? 世界をあっと言わせる発見ができるのだろうか...?

Thomas Kuhnはかつて科学という営みを、「パラダイム転換」をもたらすようなものと「通常科学」の二つに分けて、前者こそが人間の自然観を変革するものだと言った。誤解を恐れずにいえば、この考え方は探検にも応用することができ、探検にも小さな探検と大きな探検が存在していると思う。

小さな探検とは誰も入ったことのないような沢であったりバリエーションルートの記録を残すのが当てはまる。これは記録として残すことができればどんなに小さくても記録を残せばよい。「丹沢の沢100」などいい例で、

物好きの沢屋が地道に残した遡行図に基づいてにあの手の本は作られ、実際我々の役に立っている。ただその一方でこの小さな探検は対象が十分すぎるほどに小さく、いわゆる「世界を変えるような発見」パラダイムシフトのトリガーとなるような探検ではないことも容易に理解できるだろう。そのパラダイムシフトを引き起こすような探検が「大きな探検」である。最も極端かつ分かりやすい例を出せばコロンブスのアメリカ大陸発見である。これは三角貿易などを結果的に生み出し実際に世界に大きく影響を及ぼした。

無論探検部の最終目的はこのような「大きな探検」を成し遂げることであると思うが、これが様々な意味で用意でないことは誰よりも探検部員のよく知るところであろう。では我々は「大きな探検」を成し遂げることはできないのか。私はそうは思わない。

探検を続けて大発見をする保証はないと同時に、大発見をする可能性も誰も否定できない。

「serendipity」という言葉がある。

これは「何かを探している時に探しているものとは別の価値あるものを偶然見つけること」

という意味だ。我々探検部はそもそも活動を考える時点では「大きな探検」に辿り着くことはできない。それは当然で、そもそも既存の価値観を覆すような発見をするのが「大きな探検」であって、既存の価値観の中で生きている我々はそれを感知することはできず、審議の段階ではそもそもそんな活動が出てくるのは稀な例だろう。何か一つに絞ってそれをよく考えることは真理へ辿り着く一つの王道ではあると思うが、探検部の性質上向いているのは色々な活動をして経験値を積み、常に独創の気概を持って自分の「小さな探検」を積み上げてゆくことだろう。そしてこの小さな発見を繰り返す愚直さと新しい視点を模索する姿勢がセレンディビティーを呼び込み、既存の価値に囚われない大きな発見に結びつき、「大きな探検」に至る。これが私の妄想する「俺の考えた最強の探検生活」である

とまあこんなことを信じていたらいつの間にか四年経っていた...振り返ってみると残ったのは細やかな自負くらいのもので成果、実績と呼べそうなものはいずれも吹けば飛ぶほどに小さい。その割には対価にしたものは実は大きいのでは...?と偶に正気に戻りかけるが目を瞑るようにしている。

反省

まず第一に私自身が規則というものに極めてだらしない人間であったことだろう。今回の一泊でも必ずや焦点に上がっているであろう計画書の漏れであるとか遅刻が多いであるとかはこれに由来する。率先してこれらを引き締め、徹底させる姿勢を見せなかった私に大きく責任があると思う。大きな問

題にいままで繋がらなかったのは単に運が良かったに他ならない。これは我が身を振り返って一切擁護の出来ない点である。本当に申し訳なかった。もう一つは活動の意義に対する姿勢。これは多様な意見を出してほしいと思いあらゆるジャンルの活動を許容してきたつもりだが、あまりに無軌道すぎたと思う。部会にはどんなにくだらない発想でも意見でも出してかまわないと思っているが、その風潮が審議厳格性というか真剣みに影響した面はあったのかもしれない。オンラインから対面部会への移行にも失敗した感がある。突然の感染爆発で然しもの探検部も部会のオンライン化を余儀なくされたが、これによって発言の減少や署名の形骸化など気の緩みも大きくなり、対面移行してからも部会開催場所の毎度の変更なども相まってどうも風紀を締める機会を逸し、部会の雰囲気全体が厳格さを欠いたものになってしまった。加えて活動禁止下でも活動を行うことが常態化したことで、従来まで行っていた久保先生と学生課への計画書提出などの公的なプロセスも失われ、こういった緩みにますます拍車がかかってしまった。いまだに宿泊を伴う活動は原則禁止という探検部にとっては活動禁止にも等しい状況がつづいているが、もうこれまで通りの正当なプロセスを踏むようにしなければならないだろう。あとアイデアを共有する場を設けるようにするとかなんとか宣言していたが、結局できずしまいであった。

良かった点については、活動禁止ではあったがリスク度外視で大体の活動を闇活動で強行したのは結果的には正解だったと思う。当初は活動全面自粛という意見もあったが、その通りにしていたら探検部は回復にかなり時間を要していただろう。少ないとはいえ経験を積むことができた部員がいたことはいいことであったと思う。

総じて今の現役は数年前に比べて少数にはなってしまったが、いい活動を行う土壌はあると感じる。大多数の人間がテーマをもち、多かれ少なかれ自身の方針に従ってそれぞれが活動しているように見える。よく意見を出して話し合っていることも事前の様子を見て感じた。探検部は探検の定義にこだわりラジカルに活動を行う代、アイデア勝負でとにかく活動を出す代など規制と緩和の繰り返しをもう何十年にもわたり続けてきた。このままうまくけばバランスの取れた部になるだろう。頑張ってください。俺はもっと頑張る。

これからの抱負

いよいよ現役OBに編入ということで、いい機会なので自分の活動方針をよく考え直したい。例えば今までは「何をしてるんですか？」と聞かれたら「探検部に所属していてこんなことをやっています」という言い方ができたが、今後探検部を辞めた後活動も続けていくとすれば、こういう軸で自分は

活動していますというようなテーマが自分にとっては必要になってくると思う。現役OBでいる時間はその移行期間にできればいいと思う。

活動抱負

- ・ 続・ 新島地下要塞探索
- ・ 続・ 石塔伝説
- ・ 秩父赤沢岳大山沢金脈伝説
- ・ 帰雲城埋蔵金伝説
- ・ マタギ隠し沢探し
- ・ ネオトンカラリン発見
- ・ 樹海特異点調査
- ・ 毒沢ストロングスタイル
- ・ ラジカルサバイバル登山
- ・ 馬場鼠の皮衣
- ・ 東宮御所爆破計画
- ・ インパール作戦完全再現
- ・ 三池島調査

まだやりのこしたこといっぱいあるからたくさん活動出すよ！

今年も抱負が書き終わらなかった！！ア °！！！！！！

【小田竜太郎】

結果を残す。

【川崎みどり】

これまでもこれから穴があったら入りたい人生です。

来年度は考古学調査でトルコに行きます。アレクサンドロス大王の墓を見つける一步目を踏み出せそうです。

【玉田琉一郎】

飛行機に乗る機会が最近あった。その日の天気は快晴、飛行機の小さな窓から見える景色は大変良く、広々とした関東平野はもちろん、美しく雪化粧をした富士山や南アルプス、国道1号線の橋が通った浜名湖やその横には天竜川など、色々に見えるわけだが、窓から目を離し数分後、もう一度窓の外を見ると、今飛行機がどこを飛んでいるか分からなくなっていた。

今年の目標。活動、院試、就活、教職、論文、全部やります。あと、学部
の友達作りも追加で。

文責 番場良平